



研究主題

学びをたのしみ自律共創する子ども

日 時 令和6年2月10日(土) 8:50~15:50
会 場 熊本大学教育学部附属小学校
内 容 対面による各教科等の授業公開・分科会・講演

講 師

香川大学 准教授 岡田 涼 先生

著書

- 『やる気をひきだす教師：学習動機づけの心理学』（金子書房）
- 『自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術』（北大路書房）
- 『教師として考えつづけるための教育心理学』（ナカニシヤ出版）
- 『子どもと大人の主体的・自律的な学びを支える実践』（福村出版）



附属小学校ホームページのご紹介 新しいコンテンツ
続々登場!!

● 授業研究最前線

臨場感あふれる各教科の取り組みを随時更新します。

● 実践・研究ブログ

校内で行われた最新の授業実践が掲載されます。



©2010熊本県くまモン

<https://elem.educ.kumamoto-u.ac.jp> 熊大附属小 検索

附属小学校SNS

本校の実践を SNS で発信しています。共に熊本の教育を充実・発展させていきませんか？

熊大附小公式 Facebook

熊大附小 LINE 公式アカウント



研究主題

学びをたのしみ自律共創する子ども



Contents

令和5年度前期の実践紹介 研究発表会のご案内

校長挨拶

夏期休業中の8月18日に開催しました夏の実践研修会では、県内外から多くの参加者にお集まりいただき、盛況のうちに研修会を終えることができました。本校研修会を学びの場としていただいたことに感謝申し上げます。

さて、今回の研修会では、4年ぶりに国語と算数の授業を誰もが望んでいた対面による形で公開することができました。子どもたちの様子を、参加者の先生方には間近に見ていただきましたので、その後の授業研究会では、授業の事実をもとに活発な意見交換を行うことができました。やはり、臨場感溢れる、対面による研究会のよさを実感しました。引き続き、午後に行われた教科等セミナーでは、それぞれの教科等で、教科の本質に関わる点に関して、本校職員と共に学び合い高め合うことができたと思えました。研修会を終えての感想の中には、「子どもの姿から授業や授業者の意図を深く考えることができた」「提案された授業実践に対する改善点について、代案等を聞くことができとても参考になった」「これまで知らなかった新しい取組を教えてください」「今後実践してみたいアイデアをもらった」等々のご意見があり、今後の取組の励みとなりました。

さて、来たるべき令和6年2月10日の研究発表会においては、夏の実践研修会でいただいたご意見を取り入れながら、「学びをたのしみ自律共創する子ども」を研究主題とした授業の在り方について、さらに深まりがある提案を行います。よりよい授業の在り方について、多くの皆様方と議論できることを全職員が楽しみにしております。ご参会をよろしくお願いいたします。



校長 中野 浩幸

研究提言

1 個別最適な学びと協働的な学び

「実現すべき日本の令和型学校教育の姿」の中で、個別最適な学びと協働的な学びが強調されています。しかし、具体的にはどのように授業を変えていけばいいかわからないという声を耳にします。一人一人がそれぞれに活動したり、話し合いをしたりさえすれば、これらの学びが実現するわけではありません。今回は2本の実践から子どもの姿を基にご提案します。

2 国語科と音楽科の実践を基に

まず国語科の実践についてです。子どもたちは物語を読む際、個人の生活経験を基に心情を想像します。そのため、同じ叙述から異なった解釈をすることがあります。そのずれ自体は読みを深める上で大事なのですが、これまでの実践の中で、他の人の考えに興味をもてずに対話が起きにくいことがありました。そこで木下教諭は2人1組のペアをつくり、りいこになりきって質問に答えたり、りいこの行動についてインタビューしたりする活動に取り組みせました。そうすることによって、お互いが納得するりいこの気持ちを考えたり、りいこについての新しい問いを見つけたりする姿が生まれてきました。つまり、りいこになりきってみるという共通体験があったからこそ、お互いの考えについて意見を述べたり、新しい考えを生み出したりする協働的な学びの姿が生まれたのです。

次に音楽科の実践についてです。これまで音楽科の学習では、他の人の作品に対して、共感するでもなく批判的に考えるでもない、つまりあまり関心をもてずに鑑賞を行ったり、自分の作品に対してこだわりをもてなかったりする子どもの姿が見られました。そこで、音楽科の上原教諭は、友達の作品の鑑賞をきっかけに自分の作品を見つめ直す授業を目指していきました。

本実践で子どもたちは、紙をちぎるなどして音を鳴らし、その音を組み合わせる音楽をつくり上げていきました。その中で上原教諭は、音と音との間に対しては無自覚である子が多いと見取り、「間をあまり空けない曲の方が料理というテーマに合う」という子どもの考えを取り上げました。その考えを聞き、間をつめた方がよいのか迷っている子どもたちに、一度自分たちの音楽を音と音との間隔が詰まった曲につくり変えることを提案しました。実際に音楽をつくり変えてみるという共通体験を通して、音と音との間がどんな効果をもたらすのかについて検討させたのです。このように友達が着目している「間」という視点で、自分の作品を見つめ直すことで、「自分が思い描いているイメージと合わない。もっと間を空けて台所の広さを表現したい」などの新しい自分の作品へのこだわりが生まれ、それぞれの作品をつくり変える原動力となったのです。

しかし実践の中で課題も生まれてきました。間に着目して作品をつくりかえた後も、グループで1つの音楽をつくる活動を続けたため、グループ内でのそれぞれの作品へのこだわりが折り合いがつかない状況が生まれていました。そのため、一人一人が間に対してこだわりはじめた状況を見取り、グループではなく個人で音楽をつくり変えていく活動に切り替えてもよかったのではないかと考えが校内研修の中で出てきました。このように本校では子どもの事実を基に子どもが学ぶとはどういうことか1つずつ明らかにしているところです。

2つの実践に共通することとして、対話によって新たな価値を生み出す姿が見られました。そのような姿を生み出すためには、まず子どもが問いや思いをもち、話してみたいという気持ちをもつことが大切だと考えます。国語科の実践では、繰り返しインタビュー活動に取り組み、ペアでりいこの心情を想像するという共通体験を通して友達と話してみたいという思いを高めていきました。音楽科の実践では、音と音との間をつめるという共通体験を行うことによって、間について対話する土台が整い、共に新しい音の意味を創りだしていく子どもの姿を見ることができました。本年度は子どもが対話したいと感じる活動や単元構成、そして一人一人の学びを促進するための子どもの見取り、全体の場の在り方を中心に研究を深めていきます。



研究部長 磨田 慎太郎

第3学年 / 国語 / まいごのかぎ

りいこインタビューをしよう

国語科 木下 忠志



言語活動をデザインするとき、指導事項と言語活動の親和性はとても重要になります。本実践では、人物の気持ちの変化を具体的に想像するために、インタビューという言語活動を設定しました。

インタビューは、「読者」の視点と「登場人物」の視点の両方に立ち、人物になりきって答えることができる活動です。子どもたちは、行動や会話を表す叙述を基に「どうして鍵をさしたの？」等とインタビューを行い、「それはね…」と答える活動を繰り返していました。そこで生じた人物の答えの言葉の中で、気持ちを表す言葉に着目して、「どうしてそう思ったの？」とインタビューする姿が生まれました。それにより、人物の気持ちを答えようと、叙述に立ち返りながら具体的に想像する姿が見られました。

最後の場面で手を振り



実践紹介

第4学年 / 音楽 / リズムアンサンブル

ようこそ!サウンドキッチン

音楽科 上原 正士



世界は音や音楽にあふれています。しかし、それらのほとんどが聞き流されてしまい、よさや面白さに耳を傾けることはほとんどありません。そこで本実践では、身近にある物がもつ素敵な音に気づき、親しんでいくために新聞紙を用いた音楽づくりを行いました。

班に1枚の新聞紙を配ると、くしゃくしゃに丸めたり、ゆっくりと破ったりして耳をそばだてて聴く姿がありました。一人一人が夢中になって自分なりの音の出し方を探していきました。そして、音探しの中で「料理をつくっているときの音に聞こえる」という子どもの気づきがあり、それをもとに「一皿の料理が完成するまでの音」をテーマにして音楽づくりに取り組みました。

題材の中盤、グループ



続けたりいこの気持ちが変わらないという困り事を取り上げると、インタビューしながらりいこの気持ちを想像する姿が生まれました。

あさみ：りいこも鍵をさしてたのしかったし、みんなもたのしそうだった。
ゆいこ：たのしませてくれて、ありがとうって思ったってこと？
あさみ：たのしませてくれた鍵に、ありがとうって思ってるんだよ。
ゆいこ：みんな自分と同じで、好きなことをやりたかったんだよ。
あさみ：じゃあ、鍵がりいこの夢を叶えてくれたってこと。すごい、こんな読み方初めてできたよ。

一見すると子ども独特の世界観のように思えます。しかし、単元を通してインタビューに取り組み、人物になりきることで表現と理解の往還を何度も経験し、複数の叙述を関連付けたり、前の場面に立ち戻り、物語全体を読み直したりして、気持ちの変化を具体的に想像する姿が見られました。

ごとにつくった音楽を聴き合う時間をとりました。その中で、次のようなやりとりがありました。

ともこ：私はなるべく間を空けずに演奏するようにしました。
T：どうしてそうしようとしたの？
ともこ：料理が上手なおばあちゃんがつくるとき、手際がよくて料理の音がずっとしていたからです。
そうた：ぼくたちの音楽には合わないな。だって、洗い場からコンロに移動するときの時間を入れたいもん。その時の足音を入れようかな。

ともこさんは、音と音の間をなくすことによって、料理の上手なおばあちゃんをイメージしながら音楽をつくり直そうとしていました。他のグループも間という視点でつくり直したことで、それぞれの班が自分たちがつくっている音楽で表したいことをより詳細に思い描きながら、つくり直していきました。このように、新聞紙の音色を端緒として、音楽づくりを心からたのしむ姿が生まれました。